

フィジー語バトゥレレ方言の必須項と周辺項斜格標示 *i* を中心に

岡本 進 (東京外国語大学)

フィジー語バトゥレレ方言では、(1) のように、周辺項前置詞 *i* が前部要素と融合し、述部と音韻語を形成する現象が観察される (+は音韻語内の文法語境界を示す)。本発表では (1) のような音韻語を「前置詞付き動詞 (prepositional verb)」と呼び、その特性を明らかにすることを目的とする。

- (1) *la+wa+i* *na* *koronivuli*
go+thither+OBL ART school “go to school”

フィジー語バトゥレレ方言の強勢は、ほかの多くのオセアニア諸語と同様、後ろから 2 つ目の音節に置かれる。音韻的観点から、前置詞付き動詞は一つの音韻的単位を成している。(1) の *la+wa+i* の強勢は *wai* に付与される。*i* がいない場合、強勢は *la* に付与される (2)。

- (2) *la+wa*
go+thither “go away”

すべての動詞で前置詞付き動詞が観察されるわけではない。*lā* “go” で最もよく観察され、*tadra* “sit”, *moce* “go to bed” といった姿勢を表す動詞で見られる。

これらの前置詞付き動詞は、統語的にも単一の単位、すなわち他動詞として振る舞うことが予想される。事実、英語の前置詞付き動詞の名詞句は必須項としてみなしてよいようなものもある。例えば、受動化が可能であったり (*The dean was called on*)、*what/who* で置き換えられたり (*Who did John call on?*) する。しかし、フィジー語バトゥレレ方言の場合、前置詞付き動詞は統語的なひとまとまり性を一切示さない。その根拠としてその名詞句が、(i) *cā* で置き換えられないこと、(ii) 関係節化で制限があることなどが挙げられる。

結論として、フィジー語バトゥレレ方言の前置詞付き動詞は音韻的にひとまとまりであるだけであって、統語的なひとまとまり性を示す証拠はなく、音韻的境界と統語的境界が一致していない構造であるといえる。